ランドセルに想いを込めて

中　三

三月、新型コロナウイルス感染症の流行で全国の学校が休校になった。少し早い春休みを手に入れた気分で家にいることを楽しんでいたが、一か月も経つ頃には「このまま学校に行けなかったらどうしよう。」と不安になった。

宿題を終え、気分転換に始めた部屋の掃除で、クローゼットの中に仕舞い込んでいたランドセルを見付けた。茶色にピンクの縁どりがあるランドセル。買ってもらったときには嬉しくて、ランドセルを背負ったままピョンピョン跳ねたことを覚えている。お気に入りのランドセルだったが、もう使うことはない。捨てるのは忍びなくて、どうしたらいいか母に聞いてみると、

「寄付したらいいと思うよ。」

と言われて、インターネットで調べてみた。すると、いくつもの団体がランドセルの寄付を受け付けていた。その中で、アフガニスタンへのランドセル寄付を受け付けているＮＧＯのホームページが目に付いたのはなぜだろうか。たぶん、ランドセルを背負っている女の子がとても嬉しそうだったからだと思う。その女の子の笑顔を見て、私も「学校に行きたい。友達に会いたい。」と強く思った。そのホームページには女の子の就学に力を入れているとあったので、ページを読み進めた。

アフガニスタンでは、女の子の三人に一人は文字が読めない。旧タリバン政権時代は、女子教育の必要性が認められていなかったからだ。しかし、ランドセルを男女平等に配ることで、女の子も学校へ行くことが当たり前、という意識が根付いてきているそうだ。それでもまだ、女の子の二人に一人しか、小学校に行くことができていない。親が持参金を得るために、教育を受けることもなく十二、三歳で望まない結婚をさせられる。そんな女の子がたくさんいることを知り、心が痛んだ。

私には、そういった女子差別や貧困を想像することしかできない。なぜなら、ふだんの私は学校に通い、塾や習い事にも行っているからだ。次の春には高校に進学し、大学にも行くだろう。それをありがたいと感じたこともないくらい、私にとって学ぶことは至極当然のことだ。しかし、今回の休校期間のおかげで、学校でクラスメイトと授業を受けたり、部活動に打ち込んだりするような生活は、当たり前に在るものではない、という

ことを知った。今回の経験で以前より学ぶことの大切さが分かるようになった私は、アフガニスタンの女の子にも学ぶ機会が増えることを願って、ランドセルを寄付することに決めた。

六月に入り、少しずつ日常が戻ってきた。休校の分を取り戻すかのように、学校も塾も忙しい。新しい生活様式は少し窮屈だが、みんなで学校生活を送るためには仕方がない。受験生である私は、これからもっと勉強に力を入れていくつもりだ。大変だと思うが、頑張る覚悟はできている。なぜなら、学ぶことは私のもつ権利だからだ。学ぶ中で創造する力や社会性を身に付けて、将来は、環境問題の解決に力を尽くす仕事に就きたい。この夢を叶えるために、学ぶことは必要不可欠だ。

しかし、世界にはそうした学びの機会を手に入れることのできる子供ばかりではない。貧困、戦争や内戦、児童労働などの犠牲となって、学校に行けない子供がたくさんいる。その解決のために国連総会で採択されたのが「持続可能な開発目標」「ＳＤＧｓ」だ。休校中に読んだ「未来を変える目標ＳＤＧｓアイデアブック」という本によると、ＳＤＧｓの十七の目標は、お互いに別の目標とつながっている。「安全な水とトイレを世界中に」という目標を例にとると、井戸があれば安全な水が手に入り、今まで水汲みに使っていた時間で学校に通うことができる。学校に通う女の子が増えれば、やがて母になったときに、乳幼児の命を守れる。女性の権利を知れば、児童婚を拒否できる言葉をもつ。こうして「安全な水とトイレ」が、「すべての人の健康と福祉」「ジェンダーフリー」にもつながっていく。調べれば調べるほど、全ての目標の根っこにあるものは教育であり、特に女子が学ぶことがいかに大切であるかを知った。

「日本の子供は恵まれているからそれで十分。貧しい国の子供は運が悪かった……。」そんな考えを私は断固拒否する。全ての国の子供たちが「学ぶ権利」を手に入れられる世界が、近い未来に実現することを私は信じたいし、その手助けができる大人になりたい。今の私にできることは、ランドセルの寄付という小さなことしかない。しかし、その小さな行為は、確実に誰かの明るい未来につながっていく。

夏休みに入ったら、鉛筆とノートを買いに行こう。そして、ランドセルに新品の文房具と一緒に私の想いを詰めて、アフガニスタンに送ろう。私の想いが、ランドセルを手にした子の未来につながることを願って。